

❖❖❖❖❖❖❖❖  
巻頭言  
❖❖❖❖❖❖❖❖

## どう作るかから何を作るかへ

西村 正太郎\*

生産技術振興協会の機関誌が、“生産技術”ではなくて“生産と技術”であることは興味深いことです。

生産技術といえば、何を作るかということよりも、どのように作るかという製造技術に重点があるようです。これまでは、何を作るかということにあまり苦勞することなく、もっぱら製造技術の向上に努力してきた結果、わが国はいつの間にか工業国として世界のトップに肩を並べるようになりました。これまでの高度成長を支えたのも、この優れた生産技術ではなかったでしょうか。

ところが、近年、創造性の開発や自主技術の確立ということが望まれています。これは、今までもたびたびいわれてきたことですが、たまたま低成長時代を迎えて再燃したようです。しかし、これまでのようにただ導入指向型に対する反省だけではなくて、今や目ぼしいものが見当たらないということが原因のようです。創造性といい、自主性といい、今は何を作るかが問われています。生産の原点はここにあったはずです。

このような時代になって、急に原点に戻って新しいものを開発することがむつかしいのもわかります。とくに創造性というのは基礎的な研究から芽生えたとすれば、迂遠なようでもそこまでさかのぼらなければなりません。しかし、これまでの製造技術でも、全部が導入されたわけではありません。世界一というのは物まねだけで到達できるものではなく、人材なり資本なりがこの方面に傾斜して注ぎこまれた結果でしょう。新しいものの開発も同じではないでしょうか。基礎研究を育て、企業戦略と技術開発のタイミングを合わせ、新製品とマーケットニーズのマッチングをとらなければなりません。現に、こうした新しい製品や自主技術が、ぼつぼつ現われてきています。

このような現在の情勢のもとで、“生産”と“技術”の創造性、自主性を考えるとき、この生産技術振興協会と表裏一体の関係にある大阪大学生産技術研究会の意義が、改めて見なおされてよいのではないのでしょうか。大学における多くの基礎研究が、いま出番を待っているように思われます。

---

\*西村正太郎 (Shōtaro NISHIMURA), 大阪大学, 工学部長, 電気工学科, 教授, 工学博士